

## エステル記1-3章「すべてに関わる神」

### 1A 水のように流れる王の心 1

1B 傷つけられた自尊心 1-12

2B 王妃の位の剥奪 13-22

### 2A エステルの穏やかな霊 2

1B 皆から受ける好意 1-18

2B モルデカイの業績 19-23

### 3A ハマンの悪魔的敵意 3

1B ユダヤ人への呪い 1-6

2B 王の巻き込み 7-15

## 本文

エステル記を今日から読んでいきます。私たちはついに、聖書の歴史書と呼ばれる部分の最後を読むこととなります。モーセ五書は、創世記から申命記でした。そしてそこでモーセが語った律法とそれに従わないことに対する呪いが、歴史書において実現していく姿を読みました。バビロン捕囚によってその呪いが実現しましたが、そこからの帰還によって神の憐れみとその回復が描かれています。そしてエステル記を読み終えれば、その後はヨブ記であり詩歌という分類になります。

<b>I</b>	<b>B.C. 539~515</b> <b>クロス王/ダリウス王</b>	クロスによる捕囚からの解放からエルサレムの第二神殿の完成まで	エズラ記 1~6 章
<b>II</b>	<b>B.C. 479~475</b> <b>アハシュエロス王</b>	エステルが王妃となることによって、ハマンによるユダヤ人絶滅から救う。プリムの祭の起源。	<b>エステル記</b>
<b>III</b>	<b>B.C. 458~445</b> <b>アルタシャスタ王</b>	祭司であり、律法学者のエズラがエルサレムに帰還し、トーラーを中心とした民の改革を始める。	エズラ記 7~10 章
<b>IV</b>	<b>B.C. 445~433</b> <b>アルタシャスタ王</b>	ペルシア王の献酌官であったネヘミヤが崩れたエルサレムの城壁を再建する。	ネヘミヤ記

<sup>1</sup> 「牧師の書齋」<http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%82%A8%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%AB%E8%A8%98%E3%81%AE%E4%BC%9D%E3%81%88%E3%82%8B%E3%83%A1%E3%83%83%E3%82%BB%E3%83%BC%E3%82%B8>

エステル記の背景は、午前中お話ししましたように時代的にはエズラ記とネヘミヤ記のバビロン捕囚後の出来事ではありますが、場所が違います。エズラ記とネヘミヤ記は、ペルシヤになったバビロンの地域からエルサレムに戻ってきた、エルサレムとユダヤ地方にいるユダヤ人たちの姿を描いているのに対して、エステル記は帰還していないユダヤ人たちのことを描いています。

エステル記の特徴の一つは、なんと神の名が一つも出ていないことです。新約聖書にも引用されていない旧約聖書の書物であり、死海文書と呼ばれる旧約聖書の写本群の中にもエステル記は含まれていないということもあります。そこで一部の学者たちは、これは正典に含んでよいのだろうか？という疑問も出ていたぐらいでした。けれども、私はエステル記を読む度に大きな感動を受けます。なぜなら、神の名を一切使用していないにも関わらず、その話の流れに神ご自身の手が鮮やかに見えるからです。そこには、神のイスラエルに対する約束が鮮やかに描かれています。アブラハムに語られた約束である、「大いなる国民となり、彼らを呪う者を神が呪われる。」というものです。

実はある注解書によると、ヤハウエの名がアクロスティック(acrostic)という形で表れているとのことです。詩篇 119 篇が有名なのですが、各行頭がヘブル語のアルファベットになっています。同じようにエステル記を読むと、行の頭あるいは行末の文字を見ると、そこに YHVH というヤハウエの名が書かれているということです(例: 1:20,5:4,13;7:7,5)。<sup>2</sup>

私が推測するに、エステル記は、神の名が語られていないところに敢えて神の物語を書き記したのではないかと思います。この世において、キリストの名が全く語られていない状況のところ、キリストが生きて働いてくださっていることを証言していることを私たちは発見しないといけません。敢えて自分がイエスの名を語らなくとも、自分の周りでイエス様が動いてくださっていることを実感します。同じように、主なる神がユダヤ人であることも明かすことができないような、敵意に満ちた状況の中で、神がユダヤ人に働いていられることを否が応にも認めざるを得ないことをエステル記は証言しているのではないかと私は思います。

そして、エステル記はエズラ記やネヘミヤ記に記されているような、神の働きのために献身した人々ではないユダヤ人の生活を描いています。主が、「シオンにのがれよ。バビロンの娘とともに住む者よ。(ゼカリヤ 2:7)」と語っておられるにも関わらず、エルサレムに帰還しなかった彼らではありますが、それでも神が選びの民として彼らを守ってくださったことを証しています。同じように、神は、ご自身の選びによって、キリストにあって守ってくださっています。守っておられるからこそ、時に危機的状況を与えられて、確かに主が生きておられることを示してくださるのです。

---

<sup>2</sup> Explorer the Book, Sildow Baxter, p261

## 1A 水のように流れる王の心 1

### 1B 傷つけられた自尊心 1-12

1:1 アハシュエロスの時代のこと…このアハシュエロスは、ホドからクシュまで百二十七州を治めていた。…

聖書に出てくるペルシヤの王は、もちろん初めがクロス王です。それからダリヨスが出てきます。ダリヨスの息子がアハシュエロス(486-465 B.C.)です。一般の歴史書には、クセルクセスという名で出てきます。ペルシヤ時代の黄金期の人です。そして彼の息子がアルタシャスタ王です。エズラがエルサレムに帰還した時の王であり、ネヘミヤが献酌官として仕えていた王でもあります。ですから、エステル記はエズラ記 1 章から 6 章までのゼルバベルが総督で神殿を再建した時と、7 章以降の学者エズラによる宗教改革の間に関わった出来事です。午前もお話した通り、ホドがインドでクシュはエチオピアで、今のスーダンまで含みます。

1:2 アハシュエロス王がシュシヤンの城で、王座に着いていたころ、1:3 その治世の第三年に、彼はすべての首長と家臣たちのために宴会を催した。それにはペルシヤとメディアの有力者、貴族たちおよび諸州の首長たちが出席した。1:4 そのとき、王は輝かしい王国の富と、そのきらびやかな栄誉を幾日も示して、百八十日に及んだ。

第三年は、紀元前 483 年のことです。なぜこのような盛大な宴会が設けられたのか、理由が書かれていませんが、一般の歴史には書かれています。ヘロドトスという歴史家が書いていますが、ペルシヤはギリシヤに対して戦争を仕掛けています。ダリヨス王が遠征して、あの有名な「マラソンの戦い」において敗北しました。息子アハシュエロスは、再度 480 年から 485 年にかけて遠征します。有名な、ギリシヤのスパルタ軍との戦いもそこに含まれています。そこで全ペルシヤを自分のところに連れてきて、遠征の時に一つのまとまるようにしたという思惑があったことでしょう。自分の富と栄華を見せて彼らの心を自分に引きつけようとした。

けれども、エステル記では宴会が開かれたことだけが記されています。これから、いくつもの祝宴を見ます。エステルが王妃になった時のもの、またハマンと王と二人だけの宴会も出てきます。そしてエステルが王とハマンのために設けた宴にあります。そして最後は、プリム祭におけるユダヤ人たちが守られたことを祝う祭りで終わります。世の賑わいから、主にある喜びと祝いへと変わるのが、エステル記の流れです。

1:5 この期間が終わると、王は、シュシヤンの城にいた身分の高い者から低い者に至るまですべての民のために、七日間、王宮の園の庭で、宴会を催した。1:6 そこには白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結びつけられ、金と銀でできた長いすが、緑色石、白大理石、真珠貝や黒大理石のモザイクの床の上に置かれていた。1:7 彼は金の杯で酒をふるまったが、その杯は一つ一つ違っていた。そして王の勢力にふさわしく王室の酒がたくさんあった。

1:8 それを飲むとき、法令によって、だれも強いられなかった。だれでもめいめい自分の好みのままにするようにと、王が宮殿のすべての役人に命じておいたからである。1:9 王妃ワシュティも、アハシュエロス王の王宮で婦人たちのために宴会を催した。

百八十日の期間の後に、今度は、シュシャンの城の中で全ての者たちに対してその栄華を見せびらかしました。興味深いことに酒を飲むことが法令として定められていたのですが、それはこの七日間だけは適用されません。

1:10 七日目に、王は酒で心が陽気になり、アハシュエロス王に仕える七人の宦官メフマン、ビゼタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、カルカスに命じて、1:11 王妃ワシュティに王冠をかぶらせ、彼女を王の前に連れて来るようにと言った。それは、彼女の容姿が美しかったので、その美しさを民と首長たちに見せるためであった。1:12 しかし、王妃ワシュティが宦官から伝えられた王の命令を拒んで来ようとしなかったので、王は非常に怒り、その憤りが彼のうちで燃え立った。

大変なことになりました。アハシュエロスは、自尊心いっぱいの男でありましたが、宴会の最後の最後でその面子を丸つぶれにすることを、王妃ワシュティが行いました。

## 2B 王妃の位の剥奪 13-22

1:13 そこで王は法令に詳しい、知恵のある者たちに相談した。…このように、法令と裁判に詳しいすべての者に計るのが、王のならわしであった。

これがメディア・ペルシヤ帝国の特徴です。エズラ記において、神殿工事の再開を、ダリヨスが初代王クロスの書いた布告を保管庫で発見して、それで命令を出しました。そしてダニエル書でも、メディアの王が、30 日以内に自分以外に拝む者は獅子の穴に投げ込まれるという法令に署名しました。ペルシヤは、王でさえも法に基づいて動くという体制でありました。

1:14 王の側近の者はペルシヤとメディアの七人の首長たちカルシェナ、シェタル、アダマタ、タルシシュ、メレス、マルセナ、ムムカンで、彼らは王と面接ができ、王国の最高の地位についていた。…1:15 「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたアハシュエロス王の命令に従わなかったが、法令により、彼女をどう処分すべきだろうか。」1:16 ムムカンは王と首長たちの前で答えた。「王妃ワシュティは王ひとりではなく、すべての首長とアハシュエロス王のすべての州の全住民にも悪いことをしました。1:17 なぜなら、王妃の行ないが女たちみなに知れ渡り、『アハシュエロス王が王妃ワシュティに王の前に来るようにと命じたが、来なかった。』と言って、女たちは自分の夫を軽く見るようになるでしょう。1:18 きょうにでも、王妃のことを聞いたペルシヤとメディアの首長の夫人たちは、王のすべての首長たちに、このことを言って、ひどい軽蔑と怒りが起こることでしょう。1:19 もしも王によろしければ、ワシュティはアハシュエロス王の前に出てはならないという勅命をご自身で出し、ペルシヤとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにし、王

は王妃の位を彼女よりもすぐれた婦人に授けてください。1:20 王が出される詔勅が、この大きな王国の隅々まで告げ知らされると、女たちは、身分の高い者から低い者に至るまでみな、自分の夫を尊敬するようになりましょう。」1:21 この進言は、王と首長たちの心になつたので、王はメムカンの言ったとおりにした。

側近は、一方で王の自尊心を回復させるためにこのような勅令を進言し、また異教社会にある男尊女卑に基づく秩序を守るために進言したものと思われます。

1:22 そこで王は、王のすべての州に書簡を送った。各州にはその文字で、各民族にはそのことばで書簡を送り、男子はみな、一家の主人となること、また、自分の民族のことばで話すことを命じた。

この法令が、ペルシヤ全土にくまなく伝えられるようにしました。ペルシヤは、各民族の自治と文化を保持させる統治を行っていました。クロス王がユダヤ人に、彼らの神殿を建てて、ユダヤ人の神をあがめるように布告をしたように、各民族の特徴を守らせました。

こうして、ペルシヤ帝国という、世界史の教科書にも出てくる歴史の一場面がここに書かれていましたが、これがまさに、エステルが神に用いられる器として登場する舞台設定となっているわけです。お世辞にもアハシュエロスの宴会における見せびらかしや、ワシュティを王妃の座から追放することは、ほめられたものではありません。実に身勝手です。しかし、そのような極めて世的な動きの中に、実はすべてを司る神の御手があることを教えてくれます。アハシュエロスの心の動きを読む時に、次の箴言の言葉を思い出さざるをえません。「王の心は主の手の中にあつて、水の流れのようだ。みこころのままに向きを変えられる。(21:1)」

## **2A エステルの穏やかな霊 2**

### **1B 皆から受ける好意 1-18**

2:1 この出来事の後、アハシュエロス王の憤りがおさまると、王は、ワシュティのこと、彼女のしたこと、また、彼女に対して決められたことを思い出した。2:2 そのとき、王に仕える若い者たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを捜しましょう。2:3 王は、王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、シュシャンの城の婦人部屋に集めさせ、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧に必要な品々を彼女たちに与えるようにしてください。2:4 そして、王のお心になうおとめをワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心になつたので、彼はそのようにした。

この出来事はおそらく、480年かそれ以前のことだと思われます。(479年に、エステルが王妃となり、それがアハシュエロスの治世第七年で479年。)先ほど話した、ペルシヤによるギリシヤ遠征の後です。アハシュエロスは、この戦いに勝てなかったその敗北感の中で、ワシュティのことを

思い出したのでしょうか。けれども、彼女の追放は法令で定めたものであり、変更することはできません。ですから、その代替案を王に仕える若い者たちが提案したのです。ここでも、側近が王の願いを持ちあげて、王がそれを汲み取るというやり方は変わりません。

2:5 シュシヤンの城にひとりのユダヤ人がいた。その名をモルデカイといて、ベニヤミン人キシユの子シムイの子ヤイルの子であった。2:6 このキシユは、バビロンの王ネブカデネザルが捕え移したユダの王エコヌヤといっしょに捕え移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕え移された者であった。2:7 モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。このおとめは、姿も顔だちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。

シュシヤンの城にひとりのユダヤ人がいましたが、モルデカイと言います。彼は城の門に常駐していたことが後で書かれていますが、当時の城の門は行政機関の役割を果たしていたので、彼は王に仕える役人の一人でありました。そして彼がはっきりと、バビロン捕囚によって捕え移されたベニヤミン人の末裔であることが書かれています。興味深いことに、その曾祖父であるキシユは、同じくベニヤミン族であったサウル王の父キシユと同名です。そして、モルデカイとエステルは従兄弟の関係でしたが、歳が大きく離れていたのでしょうか、エステルが幼くして両親を失った時にモルデカイが養女として彼女を育てました。

彼女は、「姿も顔だちも美しかった」とありますが、午前中も話しましたように彼女が王の好意を受けたのは、その従う心にありました。先のワシュティと対照的です。ワシュティが悪い女だと決して思いません、たぶん女性の尊厳に敏感な人でなかったのではないかと思います。しかしながら、聖書では女性が慎ましく、従う心を持つことによって身を着飾ることを教えています。ところで、アブラハムの妻サラもエステルのような人でした。彼女は見目麗しい人でしたが、夫が主に導かれて旅に出ていく時に、共についていきました。「むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。たとえばサラも、アブラハムを主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れなくて善を行なえば、サラの子となるのです。(1ペテロ 3:5-6)」

2:8 王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くのおとめたちがシュシヤンの城に集められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エステルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。2:9 このおとめは、ヘガイの心にかない、彼の好意を得た。そこで、彼は急いで化粧に必要な品々とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女にあてがった。そして、ヘガイは彼女とその侍女たちを、婦人部屋の最も良い所に移した。

なぜヘガイの心にかない、好意を得たのかは書かれていません。けれども、ペルシヤ王から好意を受けたエズラやネヘミヤは、「神の恵みの御手が私の上にあった」と証言していました。またバビロンにおいて、「神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。(ダニエル 1:9)」

という言葉があります。しよ異教の国にいて、権限を持つ者たちから好意を受けるのは、主なる神がなされていることであることを、聖書は証言しています。この最も標準的な例は、エジプトのヨセフでしょう。パロの廷臣であったポティファルが、ヨセフをことのほか愛しました。そして監獄の長がヨセフに恵みを施しました。そしてパロ自身がヨセフを、第二の権力者にしました。

私たちが二月に行った東アジアキリスト青年大会について、たった二泊三日の短く、小さな集会であったにも関わらず、今、クリスチャン新聞が八回にも渡る連載で、その講義一つ一つを詳細に記事に書いています。クリスチャン新聞の編集室でこのことが決定されたものだと思いますが、これはもっぱら神の好意です。神が、東アジアの平和のためにキリスト者が祈ることを願われているからこそ、好意を与えてくださっています。

2:10 エステルは自分の民族をも、自分の生まれをも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはならないと彼女に命じておいたからである。

ここに、現代にまで続く反ユダヤ主義という精神的、霊的疫病が背景にあることを知らなければいけません。エズラ記とネヘミヤ記には、エルサレムに帰還したユダヤ人に対する、周囲の執拗な反対が書かれていました。それは、神の支配がユダヤ人を通して与えられることに対する、周囲の国々の反発であり、現代でもイスラエルと周辺アラブ諸国の間にある緊張関係につながっています。けれども、イスラエルの地にはいないユダヤ人が、このように自分の身分を隠さなければいけないほど、ユダヤ人であるということだけで憎しみを買うということは、事実存在します。

出エジプト記において、神がアブラハム、イサク、ヤコブへの約束に従って、イスラエル人をエジプトで数多くして、強くされたことを思い出してください。そしてエジプトのパロが彼らを労役に酷使しました。けれども、彼らはさらに増え、強くなるばかりです。そこでパロはヘブル人の男の子の赤ん坊を殺せと命じ、なんとナイル川に投げ入れよという命令を下しました。イスラエル人は、その民族の始まりから異邦人から恐れられ、その存在を抹消しようとする脅威の中にいたことを教えています。反ユダヤ主義がどこから来ているからと言いますと、黙示録 12 章がはっきりと、悪魔であることを教えています。イスラエルが女に例えられ、そして女を追う赤い竜の存在が出てきます。悪魔は、神がイスラエルの子孫からメシヤを出すことを何とかして阻み、彼らが救われることを何とかして阻もうとしているのです。

2:11 モルデカイは毎日婦人部屋の庭の前を歩き回り、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知らうとしていた。2:12 おとめたちは、婦人の規則に従って、十二か月の期間が終わって後、ひとりずつ順番にアハシュエロス王のところに、はいつて行くことになっていた。これは、準備の期間が、六か月は没薬の油で、次の六か月は香料と婦人の化粧品に必要な品々で化粧することで終わることになっていたからである。

モルデカイのエステルへの思いは、父が娘に対して抱いているの思いと似ているでしょう。そして、乙女たちの準備の期間が尋常ではありません。王アハシュエロスが、自分のそばめに対しても自尊心を満たすべく命じていることが分かります。

2:13 このようにして、おとめが王のところには行って行くとき、おとめの願うものはみな与えられ、それを持って婦人部屋から王宮に行くことができた。2:14 おとめは夕方はいって行き、朝になると、ほかの婦人部屋に帰っていた。そこは、そばめたちの監督官である王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王の気に入りに、指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかった。2:15 さて、モルデカイが引き取って、自分の娘とした彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところには行って行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。

王が気に入らなければ決して戻ることはできないという、非常に厳しい基準であります。ですから、自分を王に良く見せるため必死になるのは当たり前です。しかしエステルは、それをしませんでした。ここに驚くべき彼女の品性があり、それゆえ人々が彼女に好意を抱いていました。

思い出すと、モーセがそのような人でした。エジプトに対して、九の災いが下った後、出エジプト記 11 章 3 節を読むと、「モーセその人も、エジプトの国でパロの家臣と民とに非常に尊敬されていた。」とあります。モーセの伝える神の言葉によって、あれだけ酷い目に遭っていたのに非常に尊敬していたのです。ここから私たちは、神の聖さと正しさを持っている者たちに対して、神を信じていない人々は迫害すると同時に、実は一目置いているのだということに気づきます。地の塩になさい、とイエス様が言われたのはその通りです。塩気をなくしたら、ただ捨てられるだけです。

2:16 エステルがアハシュエロス王の王宮に召されたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。2:17 王はほかのどの女たちよりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と恵みを受けた。こうして、王はついに王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。2:18 それから、王はすべての首長と家臣たちの大宴会、すなわち、エステルの宴会を催し、諸州には休日を与えて、王の勢力にふさわしい贈り物を配った。

自尊心の塊であるアハシュエロスをして、エステルは彼から好意と恵みを受けました。そして、王妃となった彼女のために大きな宴会を王は開きます。休日にまでします。バビロンの奴隷にすぎなかったユダヤ人の女が、いまや世界的帝国の王妃にまでなりました。ここに、神の摂理がないと誰が言えるでしょうか。全ては、ユダヤ人が悪魔的勢力から守られるための備えであります。この世で起こっている中において、このようにして神はご自分の愛する、選ばれた者たちのために、すべてのことを働かせて益としてくださっています。



## 2B モルデカイの業績 19-23

そしてさらに、神の知恵と思慮深さによる配剤があります。

2:19 娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門のところにすわっていた。2:20 エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、まだ自分の生まれをも、自分の民族をも明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じように、彼の言いつけに従っていた。2:21 そのころ、モルデカイが王の門のところにすわっていると、入口を守っていた王のふたりの宦官ビグタンとテレシュが怒って、アハシュエロス王を殺そうとしていた。2:22 このことがモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。2:23 このことが追及されて、その事実が明らかになったので、彼らふたりは木にかけられた。このことは王の前で年代記の書に記録された。

王の役人であったモルデカイと、王妃となったエステルのコンビによる、王への忠誠とその仕事の記録です。王の暗殺に対する企みを、エステルが王妃だという地位を用いて、モルデカイが阻止しました。そして年代記に書かれますが、この業績が明らかにされる時がずっと後であることが大事です。神は正しいことを明らかにされる時を定めておられます。

## 3A ハマンの悪魔的敵意 3

### 1B ユダヤ人への呪い 1-6

3:1 この出来事の後、アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。

ハマンの登場です。ここで大切な背景は、彼が「アガグ人」であるということです。ハマンとモルデカイは、ある意味で運命的対決であります。先ほどモルデカイはベニヤミン人で、サウルの父と同じ名前の曾祖父キシュがいたことを話しました。そのサウルが、アマレク人の王アガグを殺し、アマレク人を根絶やしにせよ、という命令を神から与えられます。「サムエルはサウルに言った。「主は私を遣わして、あなたに油をそそぎ、その民イスラエルの王とされた。今、主の言われることを聞きなさい。万軍の主はこう仰せられる。『わたしは、イスラエルがエジプトから上って来る途中、アマレクがイスラエルにしたことを罰する。今、行って、アマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。』」(1サムエル 15:1-3)」しかし、サウルはアガグを生け捕りにして、良質な家畜は殺さないでいました。預言者サムエルはアガグを殺しましたが、アガグ家の他の者たちは生き残っていたようです。その生き残りの一人が、ハマンであると考えられます。

アマレクは、エサウの孫です。エドム人ですが、アマレク人としてイスラエルの前に現れ、イスラエルに敵対する民として何度も現れてきます。初めて出てきたのは、荒野の旅をしていて、シナイ山に向かっているイスラエル人に対して戦いをしてきた者たちです。主はアマレク人に対して勝利

を与えられた後にモーセを通して命じられました。「このことを記録として、書き物に書きしるし、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう。(出エジプト 17:14)」

イスラエルの民に挑みかかるということは、神ご自身に挑みかかることに他なりません。神の所有の民を滅ぼそうとすることは、霊的な意味を持ちます。アマレク人は、御霊によって生まれた者たちにある、肉の欲を示しています。「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。(ガラテヤ 5:17)」御霊に導かれるには、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。(5:24)」とあります。

サウルがアマレク人を滅ぼさなかったことによって、その生き残りがユダヤ人全滅を企てています。同じように、私たちが自分の肉を十字架につけてしまわなければ、その残された肉は私たちを滅ぼそうと挑みかかってきます。私たちは御霊によって肉を殺すか、あるいは肉の欲望を満たして滅びるかの二者択一しかないのです。

3:2 それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうとしなかった。3:3 王の門のところにいる王の家来たちはモルデカイに、「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか。」と言った。3:4 彼らは、毎日そう言ったが、モルデカイが耳を貸さなかったので、モルデカイのこの態度が続けられてよいものかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。モルデカイは自分がユダヤ人であることを彼らに打ち明けていたからである。

なぜモルデカイが、ハマンに対して膝をかがめず、ひれ伏そうとしなかったのか？ 注解書を読みましたが、彼がアマレク人であったからだというものがありました。もしかしたらそうなのかもしれません。けれども私は、ダニエル書を思い出します。ネブカデネザルの像にひれ伏さなかったダニエルの三人の友人がいます。像にひれ伏さなかった三人のことを告発した者は、彼らがユダヤ人であることを強調しています(3:8-12)。そして、メディヤの王ダリヨスの時、ダニエルは、彼以外に拝む者たちは獅子の穴に投げ込まれるという法令を知りながら、いつものようにエルサレムに向かって開いている窓に向いて、主に礼拝して、感謝していました。そして原文のヘブル語では、文法上、「自らの意志で「礼拝する、身を投げ出す、敬意を払う」ことを意味するそうです。<sup>3</sup>

ユダヤ人であることと、偶像礼拝を拒否すること、ゆえに異教の国々の王の権威にも逆らうという見方に、このモルデカイがハマンにひれ伏さなかったことに通じます。ハマンに対する敬意以

---

<sup>3</sup> 「牧師の書齋」<http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E4%BA%BA%E6%92%B2%E6%BB%85%E3%82%92%E5%85%AC%E7%A4%BA%E3%81%97%E3%81%9F%E3%83%8F%E3%83%9E%E3%83%B3>

上に、神であるかのごとくひれ伏していたのではないかと思われます。そう考えると、モルデカイが「ユダヤ人だから」という理由を上げて拒んでいることが理解できます。

3:5 ハマンはモルデカイが自分に対してひざまがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされた。3:6 ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。

ここが非常に大事です、モルデカイに対する憤りであれば、彼の個人的な復讐の話で済みます。しかし彼は、モルデカイだけでなくユダヤ人の全滅を企てました。これが先ほどお話した、反ユダヤ主義という悪魔の仕業です。彼の憎しみは単なる肉の欲望ではなく、悪魔によって触発され、ユダヤ人そのものを抹殺しようとする考えに発展するのです。私たちはハマンが、聖書時代の人物だけではないことをよく知っています。ナチスドイツのヒトラーが、「最終解決」としてユダヤ人抹殺のために六百万人を殺した歴史があります。そして、黙示録 12 章によると終わりの日に、悪魔が反キリストによってユダヤ民族を滅ぼそうとする姿を見ることができます。「自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。(13 節)」

## 2B 王の巻き込み 7-15

3:7 アハシュエロス王の第十二年の第一の月、すなわちニサンの月に、日と月とを決めるためにハマンの前で、プル、すなわちくじが投げられ、くじは第十二の月、すなわちアダルの月に当たった。

時は、紀元 474 年、エステルが王妃になってから約四年後のことです。第一の月は、3 月下旬から四月にあたります。過越の祭りが第一の月で、その時に主が十字架につけられましたから、その時期のことです。その時に、ハマンの前で呪いをする者たちがくじを投げました。そして第十二の月、すなわち 2 月下旬から三月に当たる時に当たりました。

ペルシヤにある呪いに過ぎなかった、このくじは、後にプリム祭となる日となります。箴言にある次の御言葉を思い出します。「くじは、ひざに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る。(16:33)」主が、このような異教的な慣わしをも圧倒的な勝利を与えられ、それをユダヤ人の救いを記念する日としてくださいます。

3:8 ハマンはアハシュエロス王に言った。「あなたの王国のすべての州にいる諸民族の間に、散らされて離れ離れになっている一つの民族がいます。彼らの法令は、どの民族のものとも違って、彼らは王の法令を守っていません。それで、彼らをそのままにさせておくことは、王のためになりません。3:9 もしも王さま、よろしければ、彼らを滅ぼすようにと書いてください。私はその仕事をする者たちに銀一万タラントを量って渡します。そうして、それを王の金庫に納めさせましょう。」

ハマンは、極めて巧妙に王に対して、民族絶滅の法令を書かせるよう仕向けています。まず、ユダヤ人という名を言っていない。覚えていますか、エズラ記において、アルタシャスタの時代に書かれたユダヤ人を訴える書状もありましたが、クロス王の布告、さらにダリヨス王に定めた、彼らの神を敬えという書状もあります。しかし、ハマンはその書状を探させることのないよう、ユダヤ人の名を伏せています。次に、「彼らの法令は、どの民族のものとも違って、彼らは王の法令を守っていません。」確かにユダヤ人は神の律法を持っています。けれども、王の法令に逆らうように命じているものではありません。各民族の自治と言語を保持させるペルシヤの方針であっても、王への反逆は厳しい処罰を受けます。その部分の中傷しているのが、この内容です。加えて、彼は自分で絶滅を実行する者たちに報酬を与えることを申し出ています。銀一万タラントとありますが、333 トンであると言われます。ハマンはこれだけの多額の金銭を、おそらくはユダヤ人の財産から没収したものをを使うのでしょう。

3:10 そこで、王は自分の手から指輪をはずして、アガグ人ハメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンに、それを渡した。3:11 そして、王はハマンに言った。「その銀はあなたに授けよう。また、その民族もあなたの好きなようにしなさい。」

王は、これまでの側近の持ち込む法案に対してそのまま承していきましたが、この時も同じです。ハマンに全権委任するために指輪を渡しました。その指輪が印となり、今でいう判子になります。王は、国の最高権力者である自負心から、その報酬は私が出すと断言しています。そして、民族と言っても、小さな民族でハマンの言っているように反乱分子なのだろうと思ったのでしょう。けれども、後で自分の王妃エステルも含むユダヤ人であることを知って、激しい怒りに満たされます。自分が騙されたことに対する怒りも含まれるでしょう。

メディア人の王ダリヨスも、ダニエルが獅子の穴に投げ込まれなければいけないことを知って、非常に憂い嘆きましたが、ダニエルが救われた後に、その法令に署名させた者たちを代わりに、その獅子の穴に投げ込みました。

3:12 そこで、第一の月の十三日に、王の書記官が召集され、ハマンが、王の太守や、各州を治めている総督や、各民族の首長たちに命じたことが全部、各州にはその文字で、各民族にはそのことばで示された。それは、アハシュエロスの名で書かれ、王の指輪で印が押された。3:13 書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。3:14 各州に法令として発布される文書の写しが、この日の準備のために、すべての民族に公示された。3:15 急使は王の命令によって急いで出て行った。この法令はシュシヤンの城でも発布された。このとき、王とハマンは酒をくみかわしていたが、シュシヤンの町は混乱に陥った。

第一月の十三日に発布されて、第十二の月の十三日に執行されるので、残り十一か月の猶予があります。しかしインドからエチオピアまである広大な土地です。これをなるべく早く伝えるために急使が送られました。

恐ろしいのは、ハマンがこのような時に王と酒を酌み交わしていることです。シュシヤンの町でも大混乱が起りましたが、王はそんなこととは知りませんが、ハマンは知っていながら酒を酌み交わしていました。かつて、ナチスが強制収容所にユダヤ人を送り、ガス室で大量虐殺していた時も、ナチスの役人は酒を酌み交わし、上機嫌になりながら、なおかつそのおぞましい虐殺を継続していたのです。

プリム祭では、今の正統派ユダヤ教徒の間でも、この時だけは酒を酌み交わし、酔いしれてもよいことになっているそうです。もちろん、キリスト者はいかなる時も酔いしれてはいけませんが、けれどもプリムにおける喜びと祝いは、正義の勝利の祝いです。その反対に、ハマンのような酒の酌み交わしは、悪者の祝いです。私たちは、どちらかの祝い、あるいは交わりの中に入っています。詩篇第一篇が、悪者との交わりを避け、主の教えの中に生きる勧めが書いてあります。「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。(1節)」

今回は、モルデカイがエステルに、何が起こったかを伝える話から始まります。このような絶滅の危機に際して、いかに神が完全な逆転劇を与えてくださるかを読みます。まさにそれは、罪を犯して死んで滅びるという定めを、キリストの十字架によって、恵みが満ちあふれ、義と命にあって支配するという逆転劇に似ています。自分がたとえ、罪を犯し、罪に陥り、その負の遺産によって苦しんでいたとしても、神はその全てに働いておられます。罪が増し加わるところには、恵みが満ちあふれるのです。その逆転に必要な神への信頼を、その第一歩をモルデカイがエステルに踏みだすよう促すところを、次の章で読みます。

皆さんにも、その逆転劇が用意されています。神は、その良い目的にしたがって、すべてのことを働かせてくださいます。一見、否定的な事柄であっても主が用いられます。